詩誌
極微

vol.2 青

佐野　豊
篠田翔平
森田　直

TAKE
FREE

そしてぼくらは
生きていたのだった

詩誌 極微
vol.2

青

スワン
化粧
十七歳
追い越す
ひじの瘡蓋をめくれば
憎しみに午後の雲は光る
坂道

スワン

ただのボートよりスワンのほうがいいな
自転車たくさん漕いでここまできて
今度はスワンを　きみと漕いで
すでに足が笑っている

もう少しで夕暮れの
休日のひとこま
きみと僕と
鴨もいて

取り柄のない僕たちが
ここでこうして戯れて
やっと息継ぎ出来ること
あるな

あっちのほうまで行ってみようか
もっと
遠くのあっち？
いいね

スワンを選んだ僕たちは
夢中になって
ただなかへ

あっちだよ

返事のかわりに懸命に
同時にペダル

漕いで
漕いで

化粧

思い立ったらお化粧してた
顔中おかしい苛立たしい
君の気持ちになれただろうか
一日かけて考える

朝起きた時に会う君も
夢の中で会う君も
初めて会った時から
さわれたことがない気がして

大きな長い建造物が
いつからか君の
南の窓をふさぎ
不機嫌な朝と
生乾きの臭気を量産している

君の口の形や
輪郭や
足のサイズや
上ずった声や
見えているはずのすべてのものを
もっと間近で感じるために
ぼくは今日
建造物に引っ越した

君の真ん前に足場を組んで
建造したのは誰だろう
誰の許可でそんなことしたのだろう
君の植木を刈り込んでいないか
鼻の頭や目玉の真ん中に
わいせつな落書きをしていないか
ぼくは監視を希望した

十七歳

十七歳の坂を、三年後のあなたが駆けのぼる。きっとまだ
あの屋上の水溜りは消えていない。夜明けのなかに温んでいく水の向こうへ
色を変える雲が吸い込まれていく。
（きょうは、――どこへ行こっか？）ふり仰いで、あの日
あなたがあくびした町の色を
水をたっぷりとふくませた筆で、まっしろな画用紙に塗りたくる。
日差しに反っていく紙の高低をゆびでなぞって
「いま、髪かわかしてるとこ！」あなたが来るのを待っていた。公園口から
人ごみを抜けた喫茶店の二階、うすく汚れた窓ガラスに映っていた、青空。
『青空の向こうに、いつも、きみがいた。』
のぞきこむ彼女の視線が、やさしくからだを満たしていく。つま先から、のどの奥まで
光でめざめる朝みたい、――三羽の鳥が、あふれるように
Tシャツの胸を通り抜けていく。
『ここから見上げていた。』
『ここから見下ろしていた。』きのうの夕立に濡れたまま、
あの町は、ひとつの水溜りになって瞬いているだろう。歩道のやわらかな隙間に
あなたの自転車がさしこまれる。かがみこんで
鍵を引きぬくあなたの髪が、耳からほどけて
水面にとどく。「失恋？って、二十回くらい聞かれた。」もう、届くことのないその髪が（ちがうの？）
夏の風に巻きあがる。旧校舎の屋上から
（ただの気まぐれ。）手放した紙ヒコーキは、おなじ風のこちら側で
Tシャツをかすめて消えていく。
「おまたせ。」
『――ここから、見上げていた。』窓の向こう、ぐらつく椅子に並んですわる二人の声を
うすい紙に写しとる。二枚目へ、染みとおっていくその
日々のすべてが、今日はまぶしい。
「こんど、おごるね。」くしゃくしゃになったストローの袋を
こぼれ落ちるグラスの水滴に浸して、（ほらほら、

生きてるみたい。）眠りの残るまつげを上げる。懐かしいＢＧＭに合わせて
つま先が動く。スカートのひだが呼応して、
『…生きてるよね、』あなたのペダルが、真夏の町ごと上下する。長い坂道に、大粒の汗をいくつも落としながら、
この汗が乾ききるまえに、次のバス停まで進もう（あの日々が、）『あなたも、きっと。』
「プール行こっか。」あと、数時間で（消えてしまうまえに――）
突然の雨が「…今から？」
小さな傘からはみだした二人の肩を濡らしていくだろう。すりむいた膝に
雨と混じった汗が染みこむ。明日になれば、
彼らは、いつもの喫茶店で他愛のない話をする二人に戻ってしまう。――傘を持つ手首を、
ひだり手がそっとつかむ。窓の下を
食材をいっぱいに積んだママチャリが水しぶきをあげて駆け抜けていく。耳を弾く髪の向こうで
『大好きだった！』町中の水溜りが、あの日の光を手放していく。
――あなたを思って鏡を見ることは、もう二度とないんだって、ふと思った。（つぎは、
ぜったいに遅れないから。）水面の、こちら側
のぼりきった坂のうえには、どこまでも広がる青空があって、夜勤あけのあなたは
つよい炭酸をのみほして
「生きてるよ。」小さく、のびをする。

追い越す

黄色い鈍行列車は走る
どんどこづかづか
呑気なリズム
遠くの山のその先の
知らない街まで揺れながら

どんどこづかづづ……
各駅停車
列車は無理せず
止まってしまう

ドアの向こうの
淋しいホームを
準急列車がすり抜ける
何人かの知っている人と
大勢の知らない人たちを乗せて

あれに
乗らなかったのか
乗れなかったのか
もう覚えていない
ただ不満を抱えて
見送っている
温かく沈む座席に埋まり
乗換の準備もしない

先のことを考えようとするたび
追い越していく急行に

目を奪われる
乗らなかったのか
乗れなかったのか
そのたびに思い出せない

黄色い鈍行列車は走る
どんどこづかづか
線路には
さっきから雨が降っている

ひじの瘡蓋をめくれば

ひじの瘡蓋をめくれば、青空のように化膿した皮膚だ。嵐が過ぎたあとで、兄妹がともに生きるとしたら、他にどんな方法があったのか。少女のころの母はまだ、その答えを知らない。もしもタイムマシンがあるのなら。髪に翳る少女の頬を流れた汗を、汗を乾かす風を。まどろんだ光の中で、少年は今も考える。

憎しみに午後の雲は光る

憎しみに午後の雲は光る。見開いて嘆く人の肩に花が
落ちて匂う。最晩年、という硬い響きにも、鳥は幾羽
にも響き合いながら去り、光の網で季節をひとつだけ
さらって帰る。もう途方もない昔の話、少女は、指先
でヨーグルトを掬って、舌でなめる。七月へ続く道を
誰と行こう。その指で、数えた数をこぼして。

坂道

坂道のことを　きみは覚えていて
しっかり結びつけていたね。

一本の電話が
いまになってかかりだすように
きみがいる。

あの時の　ぼくだよ
と
もう一度
きみの前には行けないけれど

きみが
坂道と　ぼくのことを
ギュッと結んでいた姿なら
思うことが出来る。

どこにも旅立ってなんかないよ
と
きみに繋がるダイヤルを
ゆっくり回しているように
ぼくがいる。

きみと並んで
はじまることばかり。

そんな第一声のもとに
帰っていくための坂道が
きみとぼくにある。

「スワン」「坂道」

佐野　豊（さの・ゆたか）

「17 歳」「ひじの瘡蓋をめくれば」「憎しみに午後の雲は光る」

篠田翔平（しのだ・しょうへい）

「化粧」「追い越す」

森田　直（もりた・なお）

編集後記

誰もが青の頃をくぐり抜けてきた。今、この時、ただなかにいる、という人だっているだろう。そんな頃を過去のことと感じるかも、まさに今なんだと感じるかも、しっかり確かめられるものではないのかもしれない。極微 vol.2 は、もう二度と同じ青を出すことは出来ないなと、幸せなため息をもらす絵描きのようではないか、とエモい気持ちのまま言い切ってみる。（佐野）

詩誌（しし） 極微（きょくび） vol.2 「青（あお）」

発行人――佐野　豊

発行所――佐野書房

発行日――2019 年 3 月 16 日

ご意見・ご感想

ご意見・ご感想をお待ちしております。三人にとって、何よりの励みになります。以下のメールアドレスから送れます。

shishi.kyokubi@gmail.com

バックナンバー

ホームページにバックナンバーを PDF で公開しています。

https://shishi-kyokubi.jimdofree.com/

表紙の文

Tristan Tzara(1935). Grains et Issues.
トリスタン・ツァラ　塚原史＝訳 (1988).
種子と表皮（思潮社）より引用